



自由民主党副総裁

高村正彦

# 国交正常化四五年 日中協調の道を展望する

——今年の日中国交回復四五周年ですが、この間の両国の関係をどのように評価されますか。

**高村** 今から四五年前、日中の先人たちは、第二次大戦の過程で生じたわだかまりとイデオロギーの相違を乗り越えて、国交正常化という偉業を成し遂げました。その先人た

ちが現在の日中関係をみたら、何と云うだろうか。

約半世紀前と比べて、日中の貿易量は約三〇〇倍になり、人の往来もはるかに盛んになりました。しかしながら、「われわれが期待した日中関係にはなっていないぞ」と、厳しい声が聞こえてくるような気がします。「君たちはせっか

聞き手 本誌編集部

こうむら まさひこ

1942年生まれ。65年中央大学卒業。68年弁護士登録。80年衆議院議員選挙に初当選し、以後12回連続当選。経済企画庁長官(1994～95年)、外務大臣(98～99年、2007～08年)、法務大臣(00～01年)、防衛大臣(07年)などを歴任。2012年より自民党副総裁。今年10月の総選挙に立候補せず、現在は非議員の立場で自民党副総裁を務める。この10月まで日中友好議員連盟会長を務めた。

く戦略的互惠関係という良い言葉をつくったのだから、その言葉を活かすようにやったらどうか」と、先人たちは嘆いているのではないだろうか。先人たちの大志に立ち戻り、日中関係の改善のために日中双方が努力しなければならぬと思います。

## 行き違いがあった江沢民主席の訪日

——高村さんは外務大臣として日中関係の転機に立ち会われました。一九九八年には小渕内閣の外相として、江沢民国家主席の訪日に尽力されます。

**高村** 日中平和友好条約締結二〇周年に合わせて、初めての中国国家主席の公式訪日でした。当時はまだ「戦略的互惠関係」という言葉はありませんでしたが、同じような考え方はすでにありました。日中両国が「善隣友好は当然のこととしてお互いに協力して地域や国際社会に貢献しよう」という意志を持ち、日中関係の前進を目指していたわけです。ただ一つ一致しなかったのは、中国側がお詫びの言葉を要求してきたことです。われわれ日本側としては、日中国交正常化のときの日中共同声明のなかに「重大な損害を与えたことについての責任を痛感し、深く反省する」との文言が入っていますので、決着がついているという立

場でした。しかし中国側の言い分は、それでは軽すぎるというものでした。

一九九八年七月、参議院選で自民党が敗れ、首相は橋本龍太郎さんから小渕恵三さんに交代しました。私は外相に起用され、すぐさま訪中を決めました。中国で私より一足先に外交部長に就任していた唐家璇さんは、私の政務次官時代からのカウンターパートであり、八月の北京で彼は私に対してこう言いました。「過去にしがみついて、おたくに迷惑はかけません」。実に印象的でした。そして翌九月に江沢民主席が来日する際には、「二一世紀に向けた長期的な協力関係」を示す共同文書を発表することを確認しました。

ところが翌日、江沢民主席にお会いすると静かな口調ながら「あなた方とは世代が違うので仕方がないかもしれないが、われわれの世代は過去を大事にする」との厳しくかつ長い演説をされました。これは私に対するお説教であると同時に唐家璇さんに対するお説教でもあるのだと感じました。江主席との間に微妙な感覚のずれがあったのは事実でしょう。

この年の主要な外交日程としては、九月に江沢民主席の訪日、一〇月に金大中・韓国大統領の訪日が予定されてい



2007年12月、北京で中国の楊潔篪外交部長と会談する高村正彦外務大臣  
(ライター／アフロ)

ました。ところが八月に中国で大洪水が起こり、江主席の訪日が二カ月ずれました。中韓首脳の訪日の順番が逆転したのです。

一〇月に訪問した金大中大統領は、「二〇世紀に起きた

ことは二〇世紀に終わらせよう」と言って、文書での謝罪を要求してきました。中国と違って日韓の場合は国交正常化に際して歴史問題に関わる文言は入りませんでした。金大統領からは、「共同文書に謝罪が入れば韓国政府は二度と過去のことを問題にしない」「将来についても自分が責任をもつ」と、日韓首脳会談前に何度もメッセージが届きました。この金大中の言葉に小淵さんがほだされて、日韓首脳会談の内容をまとめた日韓共同宣言に両国が署名をする形で、謝罪の文書化が実現しました。

中国とすれば、日本に対して謝罪の言葉を要求していながらも、渋々譲歩をして文書化しない方向で話を進めていたのに、韓国とは共同文書を作成してお詫びの言葉をいれているわけですから、中国側は急に態度を硬化させました。良好な日韓関係と引き換えに、日中関係は冷え込む結果となりました。

一月に入り、江沢民主席の来日直前に唐家璇外交部長が日本に来ました。物凄い勢いでした。「韓国が受けた何百倍もの被害を中国は受けている」「韓国との文書にはお詫びの言葉があるのに、中国のほうには入っていない。日本が入れたくないというのは、日本が反省していないというのではないか」と責め立てられました。私は国交正常

化の際、中国とは互いに打ち合わせた上で文書を作ったこと、韓国との国交正常化では過去について触れられていないことを、述べました。そしてわれわれは文書化には応じませんでした。

最終的には小淵総理が口頭でお詫びすることに決まり、その言葉については両国が打ち合わせることで話がまとまりました。江沢民主席とすればさぞ不満だったろうと思いますが、実のところ彼は首脳会談では文書にお詫びを盛り込めというようなことは一言も発していません。両外相のあいだで決着していることについて主席は認めざるを得なかったのです。ただし、その後の宮中晩餐会では、江沢民主席は挨拶の場面で歴史問題について日本批判を躊躇しませんでした。日中双方にしこりが残ったのは残念なことでしたし、そのほかの講演でも日本の過去を徹底的に批判しました。

——翌年、小淵首相が訪中しています。

**高村** 日中関係の冷え込みを首相就任直後に経験したこともあり、小淵総理は心配した様子でしたので私も中国までお供しました。ところが蓋を開けてみると何の心配も必要なかったことが分かります。江沢民主席は過去には一切触れずに大歓迎で迎えてくれました。おそらくは江沢民主席

も、相手国の国民感情を傷つけることが国益に反すること  
に十分気がついたのだらうと思いました。

## 歴史をめぐる対立と収束

——その後日中関係は、小泉首相の靖国神社参拝をめぐつて緊張しました。

**高村** 小泉さんの靖国神社参拝について、考え方は多様かと思いますが、客観的にみて日中関係は悪化しました。当時の中国では、対日関係で過去に囚われるのではなく、未来思考を重視する「新思考」の動きが生まれており、それに沿った論文が共産党機関紙に掲載されていました。小泉さんの靖国参拝は、結果として「新思考」の出鼻をくじき、比較的親日派と目されていた胡锦涛主席の立場を弱めることになってしまったのは、残念なことでした。

——次の第一次安倍政権は対中関係の改善に取り組みます。

**高村** 心情的には小泉さんよりはるかに靖国神社を参拝したいはずの安倍首相が、まずは中国を訪れて「戦略的互惠関係」を掲げ、靖国参拝を我慢したわけですから、関係改善の契機となりました。

二〇〇七年八月、私は第一次安倍改造内閣の防衛大臣に

就任し、直後に曹剛川国防部長を日本にお迎えしました。四年ぶりの日中防衛相会談です。協議後の懇親会の席で、私は靖国神社のことに触れました。「あなたは軍人だから理解してくれると思うけれども、国の命令で戦場に行き亡くなった方を、国の代表者がお参りするの当然ではないか。靖国神社が戦争を美化しているとか、軍国主義を称揚しているとか、それは中国人の誤解です」。そして、こう続けました。「他方でその誤解は一朝一夕に晴れるほど単純なものだとは思いませんし、そのことは理解したいと思っています。ただ安倍総理は、日中関係と国益を考慮して靖国参拝を我慢しているの、それを当然のことだと思われるのは困る」と。曹剛川国防部長は、「個人の心情よりも日中関係や国益を優先する安倍総理を評価します」と一言返してくれました。

——続く福田内閣で再び外相に就任しました。

**高村** 日中国交正常化から三五年の節目の年でしたが、東シナ海のカス田開発問題が懸案となっていました。楊潔篪外交部長ともよく議論しましたが、最終的には翌二〇〇八年六月、日中の中間線付近の資源開発について両国が協力することで、合意に達しました。現在協力が進んでいないことは残念に思いますが、ぜひこの合意を「平和・協力・

友好」の海として進めてもらいたいです。ともあれ、小泉政権で深まった両国の溝は徐々に埋められていったような感触がありました。

## 優れた政治家は未来志向

——第二次安倍内閣発足当初、両国関係は良好ではありませんでしたが、現在は関係改善の兆しが見えはじめています。今後何を期待しますか。

**高村** 私が思うに、優れた政治家というのは皆、未来志向です。つい昨日まで罵り合っていた、これからお互いに仲良くしたほうが得だと分かれば、その瞬間から仲良くなるのが、優れた政治家だと思えます。ただし、政治家同士が良好な関係に転じたとしても、罵り合ったときに形成された国民感情は、すぐには修正されません。自ら種をまいて育てた国民感情に、政治家は制約されます。だから自国の国民感情を駆り立てることはよくないし、相手国の国民感情を激化させることも避けるべきです。しかしそのなかでも、自らの正義を見失わずに、しっかりと行動しなければなりません。それが外交をする人間の「業（わざ）」というものです。

この一〇月に中国では共産党大会、日本では衆議院総選

挙があり、両首脳とも政治基盤を固めることに成功しました。強力なリーダー同士、日中間の懸案処理はもちろん、北朝鮮問題など東アジアの安定のために、力を合わせてほしいと思います。そして、どのような状況においても首脳同士の交流が閉ざされることのないように願っています。

——尖閣・東シナ海問題においては、依然として懸念があります。

**高村** 毅然として、かつ冷静に対応せねばなりません。尖閣諸島が歴史的にも国際法上も日本固有の領土であることは主張し続けなければなりません。中国はある時点までは事実上、日本の実効支配には挑戦してきませんでした。最近になって態度を一変させたわけです。領土に関わる問題は世論が熱くなりますが、それをいたずらに煽ることなく、双方とも冷静な対応が求められるでしょう。両首脳とも、そうするだけの政治基盤は整っていると思います。

——アジアインフラ投資銀行（A I I B）や一路一路について、どのような立場をとるべきだとお考えですか。

**高村** 「戦略的互惠関係」とは要するに、日中両国が協力してアジア地域や国際社会に貢献していくこうという、日中の全面的友好の上に成り立つ考え方だと思います。A I I Bや一路一路については、巨大な構想ゆえに難癖をつける

のは容易です。ただ、一国の行動が国益に基づいたものであるのは当然ですし、この構想の根底には国際社会に貢献しようという姿勢もあるわけですから、積極的なところを評価して、わが国も協力する姿勢を見せることは重要なのではないのでしょうか。

その上で、A I I Bについて透明性はどうかになっているのか指摘することはできます。友人としてアドバイスすることは、難癖をつけることと同じではありません。わが国は現時点ではA I I Bの枠組みの外にいますが、友人としてのアドバイスがある程度聞いていただいて、中国が国際的スタンダードを備えてくれる可能性があるとするれば、日本の参加を排除するものではないと考えます。

——日中両国において、相手国に対する国民感情がよくありません。

**高村** 重要な問題です。良好な外交関係が必要ですが、同時にあらゆる分野、あらゆるレベルでの交流を活性化させ、国民間の信頼を育むための地道な努力を続けるしかありません。そのためには、何か政治問題が起これば、あらゆる交流が止まるようでは困ります。問題があればあるほど交流は必要です。大局的観点から信頼醸成の歩みを進めてほしいと願っています。●